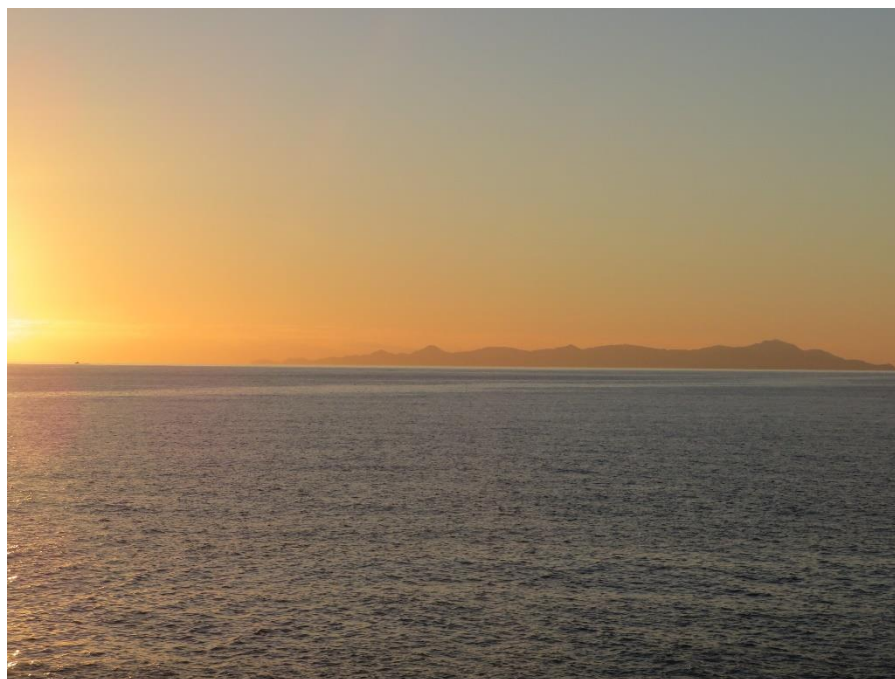


2121 離島覚書（鹿児島県・下甕島）



令和3年11月30日

甕大橋

2020（令和2）年8月、中甕島と下甕島を隔てる^{いむた}藺牟田瀬戸に橋が架かり、両島は陸続きになった。この橋は甕大橋と命名された。2011年10月に橋梁工事に着手し、約9年の歳月をかけて完成したのである。すでに上甕島と中甕島の間は橋でつながっていたので甕大橋の完成によって甕列島は一体となり、島の人々の悲願が実現した。橋で結ばれることによって、船の時間に制約されず自由に列島内を移動できるようになった。また、フェリーで90分を要した長浜と里の間の移動時間は約50分に短縮された。

上甕島から甕大明神橋、鹿の子橋を経て中甕島に入り、平良トンネル、黒浜トンネルを抜けると甕大橋だ。中甕島の県道351号線の約半分はトンネルということになる。橋の総延長は1,533mで、鹿児島県内の橋の中では最長である。

午後から降り始めた雨は次第に激しくなり、甕大橋にさしかかるところには土砂降りになった。視界はきわめて悪く、おまけに雷まで鳴り始めた。橋を渡って下甕島に入るとすぐにまたトンネル（鹿島トンネル）に入り、トンネルの先が旧鹿島村の中心地の藺牟田である。

下甕島に来るのは4回目になる。1999年12月に下甕島漁協のIターン漁業者の取材で、2005年7月には鹿島小学校の「うみねこ留学」の取材、さらに3週間後に海洋深層水の調査で手打に来ている。

下甕島は面積65.56km²、周囲84.8kmで、甕列島の中では最も大きい。島は南北に細長く、特に北部は一段と細い。現在は薩摩川内市に統合されているが、2006年の合併以前は北部の鹿島村と南部の下甕村に分かれていた。

2015年国勢調査時の下甕島の世帯数は1,232戸、人口は2,321人で、上甕島より若干多い。下甕島には、東岸に鹿島（藺牟田、小牟田）、長浜（長浜、芦浜）、青瀬（青瀬、瀬尾）、

手打の各集落が、また西岸に内川内、瀬々野浦、片野浦（浜田、郷迫、岡）の各集落がある。このうち鹿島と長浜からは本土との間にフェリーと高速船が通っている。



木の口山展望所から甑大橋と下甑島を望む（左）、蘭牟田瀬戸に架かる甑大橋（右）

土建業の島

甑列島の主島は3つの有人島からなり、各島は海で隔絶していた。また各島ともに険しい山地が連なり、道路は曲がりくねった山道が多く、移動には危険と時間を伴った。このため橋の建設と道路、トンネルの整備が求められていたのである。

甑列島の海に架かる橋の一覧を表1に、トンネルの一覧を表2に示した。橋の総延長は2,193m、トンネルは7つあり、その総延長は6,426mに及ぶ。

表1 甑列島の海に架かる橋

名称	区間	竣工	長さ(m)	幅(m)
甑大明神橋	上甑島～中島	1993年3月	420	8
鹿の子大橋	中島～中甑島	1990年3月	240	8
甑大橋	中甑島～下甑島	2020年8月	1,533	8

表2 甑列島のトンネル

名称	場所	竣工	全長(m)
小島トンネル	上甑島	1998年2月	817
平良トンネル	中甑島	2017年7月	1,674
黒浜トンネル	中甑島	2014年7月	587
鹿島トンネル	下甑島	2010年3月	497
芦浜トンネル	下甑島	1984年3月	383
青瀬トンネル	下甑島	2010年2月	1,098
手打トンネル	下甑島	2005年5月	1,370

これらの建設は1980年代から今日に至るまでほぼ継続して続けられてきた。20年前に上甑島の産業ビジョンづくりの仕事で頻りに訪れていたころから、常にどこかで道路工事などが行われているため、流出した土砂が海底に溜まり、時化のたびにこの土砂が巻き上がって海水が濁り、そのため海藻が少なくなった、といわれていた。また土木工事の雇われの方

が、収入が安定し、漁業よりも収入がよかったことから、漁師をやめて土建業に転職する人が続出したことも問題になっていた。

表3は産業分類別の就業者数の推移を示したもののだが、工事が盛んだった2000年は建設業の就業者が19.6%を占め、島の最も重要な産業になっていた。工事が下火になるにつれて建設業の割合は下がってくるが、2015年国勢調査時点でもなお13.9%を占め、常に漁業を上回っている。

しかし、甕大橋の完成をもって甕島における交通インフラの主たる工事は終わったので、建設業に依存した経済構造をこれからどのように転換していくかが甕列島の大きな課題になってこよう。

表3 甕列島における産業分類別就業者数と割合の推移（国勢調査時）

	2000年		2005年		2010年		2015年		
	実数	割合	実数	割合	実数	割合	実数	割合	
就業者総数	2,978	100.0	2,497	100.0	2,330	100.0	2,094	100.0	
1次産業	農林業	123	4.1	59	2.4	31	1.3	33	1.6
	漁業	366	12.3	261	10.5	255	10.9	202	9.6
2次産業	建設業	583	19.6	461	18.5	373	16.0	291	13.9
	製造業	113	3.8	73	2.9	79	3.4	90	4.3
3次産業		1,792	60.2	1,641	65.7	1,587	68.1	1,467	70.1
うち 医療福祉	-	#####	279	11.2	305	13.1	340	16.2	
うち 公務	453	15.2	334	13.4	337	14.5	293	14.0	

各国勢調査結果より作成

恐竜化石ミュージアム

藪牟田の集落に入るときにはますます雨は激しくなった。外を見て歩く状態ではないので、とりあえず旧鹿島村の旧庁舎に飛び込んで、雨宿りをすることにした。

旧鹿島町庁舎は、2006年の市町村合併以来、薩摩川内市の鹿島支所として使われていたが、今年の10月からサービスセンターに格下げされ、住民票などの各種証明書を発行する窓口業務だけに絞られている。

一部3階建ての大きな旧庁舎を有効に活用すべく、甕ミュージアム恐竜化石館の改修工事が行われていた。旧鹿島町は中生代白亜紀の地層から恐竜をはじめ、たくさんの海産生物の化石が発見されているので、これらの化石を展示する施設である。そのプレイベントとして甕ミュージアム恐竜化石等準備室が設けられ、これまでに発見された化石の展示と国立科学博物館の協力を得て、貸し出された恐竜の骨格標本が展示されている。兎に角、この展示品を見ながら時間をつぶし、雨が小雨になることを期待した。

サービスセンターの職員は女性ばかりだった。以前、鹿島町に来たのは、都市部から小学生を受け入れ、小学校の維持と島の環境や生業を教育に活用している事例（町では「ウミネコ留学」と呼んでいた）を調査するためだった。この活動が16年を経た今日、どうなっているかを聞いた。女性職員に概要を聞き、資料をいただく。引き続き、恐竜や海産生物の化石を中心とする展示物を見て、関連するビデオを観る。

甕列島には「姫浦層群」と呼ばれる白亜紀後期の地層が分布しており、鹿島地域の姫浦層群からは、二枚貝や巻貝、アンモナイトなどの海の生物の化石が数多く発見され、さらに恐竜やワニ、カメなどの陸や淡水に棲む生物の化石も見つかっている。特に恐竜の化石の出土

は鹿島地区を特徴づけており、2008年に獣脚類恐竜の歯や肋骨が見つかり、さらにケラトプス類の歯や竜脚類恐竜の歯などの化石が相次いで発見されている。

展示室の中央には国立科学博物館から借用したマラウイサウルスやアフロベナトルの骨格標本が展示されていた。

2階の展示を見ていると、偶然、前日泊まった「民宿たいら」のご主人に会った。ヘルメットをかぶり、凛々しく仕事をしていた。彼はガス関係の会社に務めているので、改修工事の中にガス管の工事でも含まれているのだろう。



マラウイサウルスの骨格標本（左）、下甕島で発見された恐竜の骨の化石（右）

手打武家屋敷

雨は小雨に変わったが依然として降り続く。とりあえず本日の宿泊地である手打まで行くこととし、県道 349 号を南下、旧鹿島村の小牟田、旧下甕村の長浜、青瀬の集落を経て、島の南端にある手打地区まで一気に走った。

手打集落のほぼ中央付近にある「フレッシュポートエグチ」というスーパーマーケットの駐車場にレンタカーを停めた。ここから大照寺に至る両側に武家屋敷跡が続く。小雨になったが雨が降り続けているため傘をさして武家屋敷跡を歩いた。道の両側に石垣と生垣が続き、道路にはレンガが敷き詰められ、一定間隔に街灯が並ぶ。基本的に上甕島の里にある武家屋敷跡と同じだが、こちらは街灯が整備されていて、夜間はライトアップされるから里よりも雰囲気がいい。

手打は里と同様に薩摩藩の外城^{とじょう}が置かれていたので、武士団が住んでいた。その武士団が住んだ一角が麓と呼ばれ、武家屋敷が並んでいたのである。こうした歴史的背景から手打の集落は下甕島の中心地として栄えた。甕島の外城は海路を往来する船舶などを監視、対応する役割を担っていたので、里の武家屋敷と同様、海の近くに屋敷がつけられたのである。

大照寺の手前に下甕郷土館があった。あいにく建物は閉まっていて誰もいない。庭に移住記念碑と書かれた石碑が建っていた。そこには、この手打麓地区に住む 47 戸 205 人が天明の大飢饉の時に今の鹿屋市に集団移転したとのこと、また天保の大飢饉の時も 40 戸 150 人が現在の肝付町に移住した、と書かれていた。この本土への移住以外にも、その後、種子島の各地に移住している。下甕島は農地が少なく、一方で人口が多かったから、常に厳しい生活環境に置かれていたことを物語るものだ。

浄土真宗の大照寺でUターンして駐車場まで戻る。スーパーの前は下甕島で唯一の焼酎

の醸造蔵である「亀五郎」の吉永酒造(株)があった。以前来た時に見学しているが、付近の景色はまったく覚えていなかった。

再びレンタカーに乗って海岸沿いの道路に出てから薩摩川内市の下甕支所に行く。旧下甕村役場があった建物だ。10月の組織編制で、旧4村に置かれていた支所は廃止され、上甕島の中甕地区に離島振興局が置かれ、下甕支所はこの振興局の下部組織に位置づけられている。

支所で下甕村郷土誌を閲覧し、必要箇所をコピーしてもらおう。また鹿児島大学の学生が手打地区の水産業や空き家を調査したレポートが置いてあったので、これもコピーしてもらった。



手打麓の武家屋敷の通り（左）、武家屋敷の先にある大照寺（右）

民宿だいもう

津口番所跡の隣にこの日泊まる「民宿だいもう」がある。新型コロナがひと段落して、鹿児島県内を中心とする観光客が多く来島しているようで、下甕島の宿泊施設に片っ端から電話してようやく予約できたのがこの民宿であった。

宿の女将は84歳になるおばあさんである。もう年なのでそろそろやめようとしているらしく客を積極的にとっていないようだ。後述するように下甕島の中央付近の山中に自衛隊の基地があるので、自衛隊の施設などの工事にやって来る業者らがよく泊まっていたらしい。

漁港の見える2階の部屋に案内された。宿泊客は私1人なので、2部屋をぶち抜いて使った。2階にトイレと風呂があり、入浴してから1階の部屋で夕食を食べる。カツオと水イカの刺身、牛蒡巻と里芋の煮つけ、自家製のつけ揚げ、スパゲティサラダ、ツンブリの煮つけ、茄子がついた。

電話で話した時は対応がおぼつかなく、どんな料理が出てくるのか不安だった。役場の女性に聞くと、「料理は上手ですよ」との返事、まあ無難な夕食だった。

2階の部屋からは手打の漁港が見える。道路を隔てた先に小型の漁船が係留されていた。この道路は港を形成している砂洲の部分に相当する。

宿の隣の津口番所跡は、宝永年間（1705年）ごろのものをイメージ的に復元したものだという。

激しい雨や止んだものの、その後、気圧配置が冬型に変わった。夕方から北西風が強くな

り、役場での話では明日のフェリーは欠航するかもしれないといわれていた。民宿は海の近くなので、風がだんだんと強くなるのがわかる。もし欠航になった場合は、甕島にもう一泊することを覚悟しなければならないが、果たして空いている宿はないだろうから、再びこの民宿に泊まるのかと思いながら、寝ることになる。



津口番所跡（左）、民宿だいの建物（右）

令和3年12月01日

手打

案の定、朝から激しい北西風が吹き荒れる。第1便は鹿島港、里港を抜港して直接、串木野港に向かうと放送があった。宿のおばあさんは、「2便は欠航になるから1便に乗って帰った方がいい、急げ」という。ただ下甕島には昨日の午後に入ったばかりでしかも激しい雨と雷で外を見ることができなかったので、おばあさんの忠告を無視して下甕島を回ることにした。天気予報では、午後から多少、波は収まると言っていたのでこの予報に期待した。

手打には1999年12月に全漁連の広報誌の取材で来たことがある。下甕村と下甕村漁協が今では一般的になっている「新規漁業就業者フェア」のさきがけのようなことを始め、8人のIターン漁業者が誕生したことを取材に来たのだった。この時は下甕村の「竜宮の郷」に2泊した。夕食は当時、村役場の水産係長をしていた瀧津氏のご自宅に招かれ、囲炉裏でキビナゴを焼きながら懇談した懐かしい思い出がある。たしかご自宅は海に面していたと思うが、場所は思い出せなかった。

手打地区は上述したように江戸時代には薩摩藩の外城が置かれ、代官所もあったので、古くから下甕島の行政の中心地だった。集落は手打湾の長い砂浜の背後に帯状に形成され、さらに山裾との間に農地が広がる。下甕島の中では最も平地が多い集落といえる。湾は南を向いて開けているが、東～北～西は山で囲まれているため、南風が吹かなければきわめて静穏である。

朝食を食べてすぐに宿を発ち、手打湾沿いの道を西に向けて走る。1.5kmほど弓なりの美しい砂浜が続く。西のはずれに小泊漁港があった。しかし漁船は1隻も見られない。漁港周辺は消波ブロックの製作ヤードになっていて、消波ブロックが並んでいた。

地図によると、海洋深層水の取水施設がこの付近にあるはずなのが見当たらない。海洋深層水の施設は2006年7月29日に見学しているが、当時の印象と現地は全く異なっていて思い出せない。漁港の背後に以前泊まった「竜宮の郷」があったが、現在はエリアワンと

いうホテルチェーンが経営する「小さなホテル SIMOKASHIKI」という名前のホテルに代わっていた。同社は里の公共宿泊施設も買収してホテルに衣替えしており、経営不振に陥った公営の宿泊施設を買い取って再生することを事業モデルにしているようだ。

下甕島は7つの集落に大別されることはすでに述べたが、世帯数、人口が最も多いのが長浜で、これに手打が続く。



弓なりの砂浜が広がる手打湾（左）、改装された小さなホテル SIMOKASHIKI（右）

手打漁港と漁協下甕支所

手打湾沿いの道を引き返し、東端まで戻る。途中、森進一が歌う「おふくろさん」の歌碑がたっていた。森の母親の出身地が手打だったようだ。

手打漁港は手打湾の先端の小さな島との間が砂洲で繋がり、その東側にできた湾を活用してつくられた第4種漁港（避難港の位置づけ）である。砂洲の東側には二重に防波堤が築かれているところをみると、東側の外洋から入り込む波が高いのだろう。本土との航路が縮小される以前は、ここからフェリーや高速船が発着していた。

漁港内には漁船と船外機がそれぞれ20隻ほどずつ係留されていた。小さな漁船が中心で釣りが主体なのだろう。船外機は採貝・採藻用のものと思われる。

1992（平成4）年7月に、島内にあった長浜、青瀬、手打、西海の旧4漁協が合併して下甕村漁協になり、さらに現在は甕列島の漁協が広域合併して甕島漁協になっている。旧下甕村漁協は、現在、甕島漁協の下甕支所となっており、手打漁港に事務所が置かれている。支所の傘下に長浜出張所がある。現在の支所の組合員数は正が72人、准が129人だ。取材で訪れた1999年当時の組合員数は正が193人だったので、この22年間に6割以上減少してしまった。なお、支所の職員は4人（うち再雇用が2人）、長浜出張所の職員は3人（うちアルバイトが1人）である。合併する前の旧西海漁協は島の西側に位置する片野浦と瀬々浦の両集落の漁業者で組織されていたが、後述するように現在は組合員がかなり減っているため支所の出先は置かれていない。

この支所の建物は漁港の南側に置かれている。製氷施設の脇に、1階が荷捌所、2階が事務所の建物が並ぶ。ところが荷捌所のコンクリートの柱は鉄筋が腐食しており、立入禁止と書かれている。にもかかわらず中にはフォークリフトと軽トラックが止められていた。地震でもあったら一気に崩壊しそうである。

この建物の道路を隔てた山側に給油所があった。漁協の購買事業ではガソリンも取り扱

っているのだろう。ところがこちらも給油施設の至る所に赤錆が浮かび上がっており、再投資する余力が漁協には残されていないのかもしれない。



手打漁港内に係留されている漁船（左）、漁協の荷捌場と事務所（右）

下甌郷土館

続いて武家屋敷のはずれにある下甌郷土館に出かけた。郷土館は毎週、月曜日と火曜日、そして祝日が休館日であり、昨日は火曜日で見学できなかったためだ。昨日、役場で聞いた話では、8時半に管理人が来るとのことだったので、8時すぎに訪ねるとすでに開いていた。

昨日の休館日を利用して館内を燻蒸処理したようで、マスクングに使用していたビニールを管理人の男性が外しているところだった。入館料は無料である。郷土館は2階建てで、2階部分は燻蒸処理をしていないというから、2階から先に観ることにした。

展示物は盛りだくさんである。地元の民家に残されていた漁具、農具、山具などとともに生活具がベースになっているが、その他に島内で発掘された甕棺、一向宗の弾圧の歴史、島にやってきた宣教師のこと、島の伝統的な武芸、連絡船の歴史、トシドン（下甌島に伝わる来訪神で秋田県のナマハゲに似る。国の重要無形民俗文化財に指定されている）、葛の蔓や芙蓉の木の繊維で作られたクズダナシ、ビーダナシと呼ばれた着物類、宝石サンゴ漁に関する展示など、きわめて幅広い分野に渡っている。

宣教師に関しては「下甌郷土館だより」に書かれていた内容を紹介しておく。フランシスコ・ザビエルが薩摩を訪れたのは1549年、その50年後に薩摩藩は長浜出身のレオン喜左衛門の案内でスペイン人の宣教師モラレスら5人を長浜に招いた。薩摩藩としては幕府の目が届かない甌島で、ヨーロッパの進んだ文化の吸収と密貿易で利を得ることを狙ったようだ。

展示物の中で目を引いたのが宝石サンゴ漁に関する展示だった。宝石サンゴの採取は高知県や鹿児島県の南方海域が有名であるが、甌島で宝石サンゴを採っていたことは初めて知った。甌島における宝石サンゴ漁の歴史は次の通りである。

甌島で宝石サンゴ漁業は、1887（明治20）年ごろに、甌沖でフカを獲る延縄に珊瑚樹の枝先がかかったのが始まりとされている。その後、九州各地から手打沖にやってきてサンゴ漁が盛んになる。1903（明治36）年当時は、薩摩珊瑚採取組合（41隻）、薩海珊瑚採取組合（52隻）、^{ばいかい}甌海珊瑚採取組合（43隻）の3つの組合があり、手打からは29隻がサンゴを採っていた。なお高知県、熊本県の牛深、さらに手打以外の甌島各地の船も参加していたよう

だ。郷土館には薩摩珊瑚採取組合の旗やサンゴを採る漁具なども展示されていた。しかし乱獲がたり、戦前にはサンゴ漁は終焉を迎えている。

同じ敷地内に手打地方の民家が移築されていた。こちらは中に入らず外から見ただけで済みました。

郷土館の裏手には薩摩川内市立手打小学校があった。なお、中学校はすでに廃校になり、下甕島島内の中学校は青瀬集落にある市立海星中学校1校だけになっている。



農山漁業の民具に関する展示（左）、珊瑚漁に関する展示（右）

郷土館を後にして、車を昨日と同様にスーパーマーケットの駐車場に停め、その先にある新田神社に行く。菊の御紋が掲げられた石づくりの鳥居を抜けると、左手に招魂碑と太平洋戦争の時の戦没者慰霊碑が置かれていた。その先の正面に瓦葺きで外壁を赤く塗った社が鎮座する。狛犬の前にはソテツが植わる。

片野浦

下甕島の西岸は冬季の季節風の影響をまともに受けるから人が住むには適さなかったはずである。それでも人間とはたくましいもので、西岸に片野浦と瀬々野浦という2つの集落が形成されている。

手打の集落から県道349号を青瀬に向かい、手打トンネルの手前を左折して県道350号に入り、島を横断してまっすぐに片野浦に向かった。

片野浦は、岡と郷迫^{ごうぎこ}、浜田という3つの集落で構成される。岡とこれに近接する郷迫は内陸部にあり、主として農業で暮らしを立ててきたと思われる。浜田の集落は岡から浜田川という小さな川沿いを下った先にあり、こちらは海に面しており、漁業がメインであったに違いない。片野浦の住基台帳上の人口は116人（79戸）で、下甕島の集落の中では内川内、瀬々野浦に次いで少ない。

山道を抜けると、最初に岡の集落が現れた。海から吹き上げる風を防ぐためか、各家の周囲は高いブロック塀で囲われている。岡には子岳小学校が置かれていたが、2012年3月に閉校になっている。

浜田川沿いの道を下っていくと、海に出た。集落の前に片野浦漁港（第1種）が整備されているが、冬型の気圧配置が強まっていたこの日は猛烈な北西風が吹き荒れ、立っていることもできない。漁港には漁船2隻と船外機2隻が置かれていたが、秋から冬にかけては波浪

が厳しいため、手打漁港あたりに避難している可能性もある。漁港の脇に公園とキャンプ場が整備されている。少々データが古いですが、2017年の港勢調査によると、片野浦漁港の登録漁船数は39隻であり、この年の水揚量はわずか30.8トン、水揚げ額は2,000万円であった。営まれている漁業は小型定置網と刺網、曳釣り、カジキの刺網などで、カツオとカジキが主な漁獲物である。正組合員は9人であった。しかし、現時点では、さらに減少しているものと推察される。

風が猛烈に吹き荒れているから誰もいない。ほうほうのていで漁港を後にして内陸部の小さな集落、郷迫を経て、瀬々野浦に向かう。



岡集落と浜田集落を結ぶ浜田川（左）、片野浦漁港（右）

しんきろうの丘

片野浦から島の中央部のくねくねした山道を通り瀬々野浦^{しんぬうら}の集落に向かう。途中、見晴らしのよい高台に出た。この場所は「しんきろうの丘」と呼ばれている。青瀬在住の故平田医師が瀬々野浦へ往診に向かう道すがら、はるか水平線の彼方に林立する白色のビル街を認めて詠んだとされる句、「往診の道すがら見ししんきろう」が石碑に刻まれていた。このしんきろうは遠く中国大陸の都市ではないかといわれている。

医師が住んでいた青瀬のちょうど反対側が瀬々野浦の集落になるので、下甑島の中央部を横断して往診に向かったのだろう。車が通行できる林道が整備されてからまだ50年ほどしか経っていないので、当時は「助六古道」と呼ばれる山道を歩いて瀬々野浦まで行ったものと思われる。青瀬から瀬々野浦までの山道は約6kmで、標高差は365mあったというから往診する医師は1日がかりの仕事だったにちがいない。診る方も、受ける方も大変な時代であった。医者若くは若くは務まらない仕事だった。

この位置から「ナポレオン岩」と呼ばれる大きな岩が見える。高さが127mもある。ナポレオンの横顔のように見えることから、こう呼ばれるようになった。ほぼ切りたった断崖であることから、ロッククライマーにとっては魅力的な島のように、時々チャレンジする人もいるようだ。

沖からの北西風が吹き荒れている。海面は白波が立ち、空はどんよりと曇っている。遙か眼下に瀬々野浦の集落が見える。



しんきろうの丘の石碑（左）、丘からみえるナポレオン岩（右）

瀬々野浦

しんきろうの丘から相当険しい坂を下りきった海沿いの集落が瀬々野浦である。10 時に到着した。集落の背後の3方高い山で囲まれ、西側は海だが、開放的な海岸であることから東シナ海からの北西風をまともに受ける位置にある。こんな厳しい環境の場所に集落が形成されているとは、ほとんど信じられないほどの驚きであった。

昭和後期に手打・長浜方面への道が開通するまでは細い山道しかなく、海上交通に依存していたと思われる。その海上交通も冬の間は船を出すことも不可能だったに違いなく、巢ごもり状態に置かれ、まさに陸の孤島だった。

いつ頃から瀬々野浦に人が住み始めたのかよくわかっていないが、江戸時代後期に伊能忠敬が測量に訪れた当時はすでに 210 戸ほどの世帯があったというから、このころにはすでに大きな集落が形成されていたことになる。人々は背後の山を開墾して段々畑を切り開き、海で水産物を獲って、半農半漁の自給的生活をしていたのだろう。

フェリーの運航情報を得る必要もあったので、集落内にある簡易郵便局を訪れた。郵便局は郵便物の配達をするから島の実際の詳しい世帯数を把握している。局の女性によると、現在瀬々野浦には 70 人（55 戸）が生活をしているとのことだ。2021 年 11 月 1 日現在の住基台帳上の人口は 103 人（82 戸）であるが、実際に住んでいるのはこれよりも相当少ないことになる。そして大部分が単身世帯なのだ。最盛期には 1,500 人が住んでいたというから、当時の 5%ほどに激減してしまった。社会が便利になり、このような僻地での生活に耐える人はいなくなってしまったのだろう。

単身世帯が多いためか、港の近くには高齢者保健施設が置かれていた。

近年の瀬々野浦集落の人々は漁業と土木作業で暮らしをたて、冬場は出稼ぎに出かけた。外洋に面している瀬々野浦漁港（第 1 種）の建設は困難をきわめただろうから、かなり長期にわたって建設が進められたにちがいない。したがって、仕事は切れ目なく続いたから、公共の港湾工事によって集落の人々の暮らしが支えられていたのであった。

続いて集落背後の高台にある旧西山小学校を訪ねた。地元住民が石垣を積み校庭を作ったようで、石垣の高さは最も高いところで 10m に及ぶ。ここに鉄筋コンクリートづくり 2 階建ての校舎が残っている。2013（平成 25）年に閉校になっており、校舎の片隅に閉校記念碑が置かれていた。西山小学校は 1880（明治 13）年設立され、132 年の歴史を刻んだ。創立以来の卒業生総数は 2,335 人、最多児童数は 1935（昭和 10）年の 353 人であった。私

が通った横浜市北部の田奈小学校の全校児童数は当時 400 人強であったから、それと変わらない規模の時代が離島のそのまた僻地に存在していたわけだ。今のように都市に密集して人が生活するようになるのは人類の歴史からみて異例のことなのだろう。

続いて漁港に行く。外洋からの波をまともに受けるから、漁港の前面には 200m はあろうかという一文字の防波堤が沖に築かれている。防波堤の外側にはテトラポットがうず高く積まれて、その高さは 10m ほどに及ぶ。砂浜が埋め立てられて野積場がつけられ、そこに小型定置網の網が干されていた。港は二重になっていて奥の一角に漁船が 5 隻係留されていた。一番懐の深いところに斜路も整備されている。ただし船外機はなかった。集落の前は礫まじりの砂浜になっており、浸食防止のため波消ブロックがやはり一文字に並べられ、その長さは 100m 以上に及ぶ。

厳しい海象条件のため、工事費はかなり嵩んだと思われるが、人が少なくなり、漁港は十分活用されているとは言い難い。2017 年の港勢調査では、この漁港を利用する正組合員は 10 人、水揚量は 2.5 トン、水揚げ金額は僅か 200 万円に過ぎない。ちなみにこの集落では小型定置網と刺網、一本釣が営まれている。

漁港の近くには「浦島」という民宿があった。観光客は稀に来るのかもしれないが、メインは工事関係者や行商の人だったのだろう。

展望所にかかる坂道の途中に集落を見渡すように墓地が並ぶ。前の平展望所からは集落全体が眺望でき、ここから集落の写真を撮影した。



前の平展望所より瀬々野浦の集落を眺望（左）、高台に置かれた西山小学校跡（右）

自衛隊レーダー基地

10 時 27 分に瀬々野浦を出発し、県道 350 号に入り、下甕島の尾根を越えて東海岸の長浜地区に向かう。

この尾根筋に航空自衛隊の下甕島分屯基地が置かれている。島のほぼ中央部、いわば臍の部分にレーダー基地があり、そこから約 2 km 北に分屯地がある。西部航空方面隊春日基地に所属する。この基地はもともと 1954 年に米空軍が電波探信機を設置したものだが、1958 年に航空自衛隊に移管された。

この基地の先に内川内の集落がある。この集落も見ておきたかったが、道路が細く、時間的余裕がなかったので行くのを断念した（下甕島の集落のなかで行けなかったのはここだけ）。

内川内は瀬々野浦の 6 戸が 18 世紀初めに移住して切り開いた開拓地で、標高 300～400m

の高地にある。たぶん瀬々野浦の人口が増えて過剰になり、新たな土地を求めて移住したの
だろう。海とは断崖によって隔てられていたから漁業は営まれていなかったに違いない。伊
能忠敬が測量に訪れた江戸時代には20戸の集落に発展していたといわれており、一時は小
中学校も置かれていた。現地に行けなかったのが、想像の域をでないが、今は廃村寸前の状
況であろう。

国勢調査の産業分類別就業者数（公務員）から推定すると、自衛隊員の数は百数十人に及
ぶだろう。長浜の住基上の人口は625人なので、自衛隊関係者の人口割合は高く、地域の経
済にかなり大きな貢献をしているものと考えられる。

長浜地区には自衛隊員用の5階建ての集合住宅がある。隊員はこの住宅に住み、山の上ま
で通っている。基地に向かう分岐点から長浜にかけての道路は、自衛隊員が通う道だけあつ
て、少し幅が広くなり、完璧に舗装されていた。長い坂を下ると長浜の港に着いた。ちょう
ど11時であった。



下甑島の隣の部分に置かれているレーダーサイト（左）、分屯地の敷地（右）

長浜

長浜は下甑島の東海岸のほぼ中央部に位置している。東に向いて開かれた比較的開放的
な湾でもともと手打湾と同じように美しい砂浜が続いていたと思われるが、地方港湾・長浜
港の建設によって、砂浜の大部分が失われている。

背後の高い山が冬季の北西風を遮るから、鹿島港や里港に較べると比較的静穏度が高く、
両港を抜港しても長浜には間違いなく入出港が可能なようだ。フェリーと高速船は港の中
央部の埋立地から発着し、漁船の船溜まりは港の北端と南端に置かれている。



長浜港と長浜の集落（左）、長浜港の船客ターミナル（右）

長浜の港の背後に集落が形成されている。この最も高い位置に長浜小学校が置かれている。長浜は甑島の交通の要衝であり、下甑島の中では最も人口が多く、425戸、625人が暮らしている。ただ上述したように、この中には相当数の自衛隊関係者が含まれるので、在来島民ベースでみると、手打の方が多いかもしれない。

なお長浜湾の北側には芦浜と呼ばれる小さな集落があり、芦浜漁港（第1種）が整備されている。

長浜出張所とタカエビ漁

長浜には甑島漁協下甑支所傘下の長浜出張所が置かれている。職員が3名（うちアルバイト1人）配置され、石油類を中心とする購買事業をメインに営む。出張所はガソリンスタンドの中に併設されている。建物は最近できたようで比較的新しい。手打のスタンドとは対照的である。なお、ここは長浜の集落では唯一のガソリンスタンドであり、島民にとって欠くことのできない存在となっている。

事務所に顔を出して、地元の漁業の様子を聞いた。長浜には、鹿児島県で「タカエビ」と呼ぶヒゲナガエビ *Haliporoides sibogae* を小型底曳網で獲っている漁船が4隻ある。このエビは中型のエビで、「薩摩甘エビ」のブランドで流通し、主として刺身やフライで食べられている。

タカエビは水深 350～450mに棲む深海エビである。甑島の東側は急峻な海底地形であることから、島から比較的近いところに漁場が形成される。甑島でタカエビを漁獲しているのは長浜が唯一である。甑島以外では阿久根（薩北）と坊津（薩南）の2地域にタカエビを漁獲対象とする漁船がいる。

タカエビは1968年に鹿児島県の漁業調査船が漁場開発したのが始まりで、翌年から民間の船が操業を開始した。多い時には約90隻に増加し、年間500トン以上を水揚げして、活況を呈したが、やがて漁獲量は100トン強まで落ち込んだ。このため、資源管理の必要性が叫ばれ、1～3月を禁漁にするとともに、網目の拡大、1日の操業回数を4回に制限、さらに土曜日を休日にするなどの措置がとられている。

長浜地区では2～4人が乗り込んで操業している。出張所脇の岸壁に1隻、長浜港南部の漁港区域に3隻の小型底曳網漁船が停泊していた。



ガソリンスタンドを兼ねた長浜支所の事務所（左）、タカエビを獲る小型底曳網漁船（右）

青瀬

昨日は土砂降りの雨の中を通過しただけだったので、長浜から再び南下し青瀬地区に向かう。海から少し内陸に入った高台の道を進むと、下甌島で唯一の中学校になってしまった市立海星中学校が海を見渡す小高い位置に置かれていた。長浜から約3kmなので歩ける距離だが、生徒たちの居住地は広範囲にわたるので、島内バスやスクールバスを利用する生徒が多いようだ。

坂を下って海に出たところの集落が青瀬である。小さな川を挟んだ両岸に集落が形成され、山の方へと広がっている。おそらく背後の山を切り開き、半農半漁の生活が営まれていたと推定される。海側は長い砂浜が続き、海水浴場にもなっている。途中の道路脇に集落の人々の墓地が並んでいた。砂浜の一番南側に小さな船溜まりがあり、船外機が4隻とイセエビを獲る刺網が置かれていた。

瀬尾を含む青瀬地区には、2021年11月1日現在、101世帯140人が住民登録されており、長浜、手打、藺牟田に次いで多い。

さらに南下すると、小さな河川が流入する先に青瀬漁港（第1種）があり、定置網の網が漁港用地に干してあった。県道はここから青瀬トンネルに入るが、トンネルの手前を左折すると瀬尾の集落があり、人家が4～5軒ほど並んでいる。また県道の反対側に「かご松」という民宿があった。

この青瀬地区の漁業は1788（天明8）年に始まったとされる伝統的な定置網である。当時は現在の定置網とは趣を異にし、藁縄で作られていた。道路脇に青瀬生産組合と書かれた保冷車2台（出荷用）とトラック（漁具資材運搬用）が置かれていた。おそらくもとは「村張り定置」で、その後生産組合を組織して今日に至るのだろう。できれば取材したかったが、時間がなかったので諦めた。



河口に形成された青瀬の集落（左）、青瀬漁業生産組合の定置網（右）

鹿島

鹿島地区は、雨で旧鹿島町庁舎にある甌ミュージアム恐竜化石等準備室を見学しただけだった。朝方、激しく吹いていた風は多少和らいだようで、フェリーの第2便は運航されることが決まった。フェリーの出発時間まで余裕があったので、青瀬から長浜に戻り、下甌島の最北端の鹿島地区まで足を伸ばすことにした。

下甌島の東岸の手打と藺牟田を結ぶ県道は、急峻な山岳部を通り、幅員は狭く、急カーブ

が連続していたから、車よりも船の方が便利だったにちがいない。しかし最初に記したように1980年代からトンネルや道路が整備され、陸路は大幅に改善された。長浜からの坂を登って山中に入ると、かつては幅員が狭く急カーブが連続していたと思われる道路は舗装され、トンネルによってまっすぐになったのでかなりスピードが出せた。

芦浜トンネル（1984年3月開通、全長383m）を抜けると、やがて旧鹿島村に入った。道路の両側はくびれて海が迫り、地峡部を形成する。その幅は100mもないだろう。道路はやがて東海岸に出て、道路脇に集落が現れた。鹿島地区に2つの集落があるが、その1つの小牟田である。道路脇に60基ほどの墓石が並んでおり、小牟田の集落の人々の墓と思われる。ここまで来る間に、中山と寺家という集落が以前あったようで、廃村跡地を示す標識が立っていた。

小牟田から東海岸の道をまっすぐに北上すると藺牟田の集落に入る。漁港背後のくぼんだ土地に家々や寺、商店、公共施設などが立ち並ぶ。

旧鹿島村は1949（昭和24）年に薩摩郡下甕村から分立したが、おそらく地形条件から地峡部を境に北と南は隔絶しており、一体的な行政は難しかったのだろう。2021年11月1日現在の鹿島地区の世帯数は229戸、人口は350人であった。下甕島では長浜、手打に次いで多い。しかし2015年国勢調査時の世帯数は240戸、人口は413人であったので、この時点からさらに減少している。



道路沿いに形成された小牟田の集落（左）、谷あい形成された藺牟田の集落（右）

大型定置網

フェリーや高速船が発着する鹿島港の南側に、前面を防波堤で囲まれた藺牟田漁港（第2種）が整備されている。ここには甕島漁協の鹿島支所が置かれている。現在の組合員数は正36人、准51人である。支所には2人の職員が配置されている。

鹿島地区の漁業は定置網とキビナゴを対象とする刺網が主体である。定置網は大型が3ヶ統、小型が6ヶ統という内訳で、何れも個人が経営している。定置網の漁獲物はブリ類とアジ、ソーダカツオなどがメインである。2017年の港勢調査時の組合員数は正が42人、准が58人であったから、この4年間に正組合員が6人減っている。この当時の水揚金額は1.56億円であった。

漁港の中央付近に突堤が築かれて、その北側に定置網関連の漁船が係留され、漁港用地には定置網の網類が野積になっていた。突堤の南側には小型の漁船が20数隻係留されている。

また南側に漁協の荷捌き場や製氷施設が並ぶ。



甌島漁協鹿島支所の建物（左）、定置網の漁船と漁具（右）

うみねこ留学

前日は激しい雨だったため、鹿島小学校を見ることができなかった。同校には 2005（平成 17）年に「うみねこ留学」について調査に来ているので、その後どうなっているか気になっていた。

あれから 16 年経っていたが、学校は健在で、校舎はもとのままだった。以前来た時はもっと寂れているような印象だったが、当時と異なり、明るく感じられた。かつて集落ごとに置かれていた小学校は、子供たちの減少と共に相次いで休校や廃校となり、現在、下甌島の小学校は、手打と長浜、そして鹿島小学校の 3 校だけになってしまった。

旧鹿島町は過疎化の進んだ小学校を維持しようと、島外から児童を募集する「うみねこ留学」を 1996（平成 8）年から始め、児童数の確保を図ってきた。昨日、役場で聞いた話では、現在もこの取り組みは継続しており、今年の留学生は 11 人だったようで、地元の里親のもとから通っているそうだ。そして四半世紀に及ぶ累計留学生数は 279 人に及ぶという。取り組みを始めて四半世紀になるので、毎年、10 名ほどの留学生がやってきたことになる。



鹿島小学校

藺落展望台

藺牟田の集落の背後には真宗大谷派の徳船寺、鹿島小学校、公民館、旧庁舎、郵便局、老人ホームなどが並び、山の麓に旧鹿島中学校がある。中学校は 2012 年から休校中であり、地区内の中学生は上述した長浜のはずれにある海星中学校に通っている。旧役場の庁舎は先に示したとおり恐竜ミュージアムに変身中である。

旧鹿島中学の裏手から展望台に登る道がある。道路の行き止まりに駐車があり、ここに車を停めて展望台まで登ることにした。私以外の車は停まっていなかったため、先行者はだれ

もないことになる。

山の中に遊歩道が整備されていて、登っていくとT字路にぶつかった。左手に進むとカノコユリが群生する百合草原、右手を登ると^{いおとし}蘭落展望台に至る。冬型の気圧配置の影響で海からは猛烈な強風が吹き上げてくる。海側は高さ100mほどの海食崖が連なり、海水のしぶきがすごく、笹の陰に隠れないとびしょ濡れになってしまう。この季節にユリは見られないので右手に曲がり、展望台をめざした。途中に「念仏発祥之地」と書かれた石碑が置かれていた。

薩摩藩は1597（慶長2）年2月、一向宗禁制令を発し、厳禁とし、信者を取り締まったことはすでに述べた。1672（寛文12）年ごろに鹿島に往来していた上方の伊平がひそかに信徒の依頼を受け、この地にご本尊を奉迎した。信徒は役人の目を盗んで拝み、信仰を深くし、春秋の彼岸の中日には蘭落の丘に集まり、西海に沈む夕日を極楽浄土の桜門に入る佛になぞされて拝んだという。この風習は代々伝えられて現在に至るらしい。

念仏発祥の地からさらに山道を登ると、やがて蘭落展望台に着いた。ここから集落の写真を撮って引き返した。

レンタカーを駐車した場所まで戻り、エンジンを掛けようとしたが掛からない。周りに人はいないし、集落まで歩いて助けを求めてもかなり時間を要するだろう。下手をするとフェリーに乗り遅れる可能性もある。かなり焦ったがひよんなことからエンジンが掛かり、事なきを得た。時間が迫っていたので、来た道に戻り、長浜港に直行した。蘭牟田を13時27分に出発し、13時50分に長浜港に着いた。



展望台の途中にある甑島念仏発祥の地の石碑（左）、北西風が吹き寄せる鹿島断崖（右）

長浜港の船客待合所内にある食堂で天井を食べる。エビはタカエビではなく、輸入品だった。14時35分発の「フェリーニューこしき」に乗船、串木野新港に向かう。依然として北西風が吹き荒れているが、長浜港の背後の高い山のおかげで、風は遮られ、それほど揺れなかった。鹿島と里は北西風の影響がより強く受けるが、長浜は下甑島の中央付近にあたるため、風の影響は最も少ない港といえよう。

天候が悪化していたためか、観光客はほとんどおらず、来た時とは対照的にフェリーはガラガラであった。フェリーは鹿島、里には寄らず、串木野に直行した。

串木野から高速道路を通り、鹿児島空港から帰路に着く。